ごあいさつ

小浜地域は、明応年間（15世紀末）に浄土真宗の亀摂寺が建立され、その寺内町として発展しました。その後も大阪や京都と有馬、西宮などを結ぶ交通の要衝であるところから、江戸幕府の重視するところとなり、幕末までの間、旅籠や木賃宿、馬借などが並ぶ宿場町として大いに栄え、大工や左官の町、酒造りの町としても知られています。

その後、幾多の変遷を経て今日に至りますが、現在も当時の面影を残す町屋や制札、大工道具などの歴史資料が残っています。

こうした歴史や伝統、あるいは文化遺産を大切に保存し、市民の方々に広く紹介するとともに、次の世代に引き継いでいくことが、私達に与えられた使命であると考え、この「小浜宿資料館」を建設しました。

皆様方にはぜひ、当資料館だけでなく、周辺のたたずまいや、歴史的町並みも併せてご覧いただき、往時の町並みや生活の様子を通じて、当市の歴史の一端に触れていただけましたら幸いです。

なお、当資料館の設置に際し、戦国時代の武将・山中鹿之介幸盛を祖先とする山中家の多大なご協力を賜りました。特に入り口西側にある土蔵は山中家が使用されていたものを、そのまま収蔵庫として改修しています。

最後になりましたが、山中家並びに地元の方々のご好意と、長年にわたるご努力に対しまして、ここに深く感謝の意を表し、ごあいさつといたします。

宝塚市教育委員会

小浜の町並み

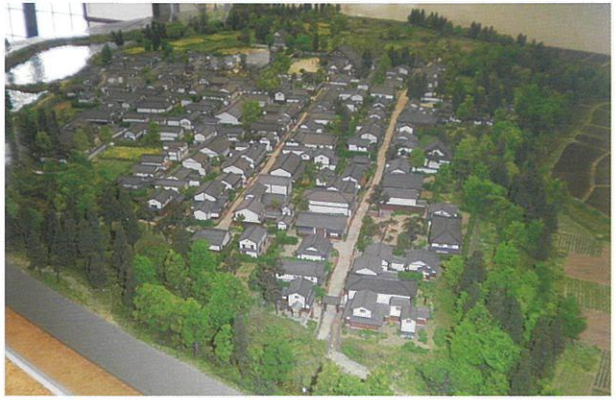
小浜の成立については明確なことはわかりませんが、明応年間（15世紀末）に、僧・善秀が小浜庄を開いたという記録（『摂陽群談』）があり、おそくともこの頃にはこの町の核になる亀摂寺が成立していたと考えられています。また、『私心記』によって永禄三年（1560）に亀摂寺があったことが確実視されています。

このように16世紀前半には小浜が真宗寺内町として、北陸から近畿一円に作られた他の浄土真宗寺院と同様に布教と戦国大名に対抗するため、交通の便が良い、要害の地を立地として築かれました。

小浜は、自然地形をうまく利用し、北・西・南の三方を大堀川が迂回し、東側は谷の上池・下池及び土塁で囲まれており、城塞的様相を示しています。

小浜の地が「町」として現れるのは、江戸時代の初頭の元和三年（1617）のことで、『高改帳』に「七拾石　小浜町」と記されています。その後の史料にも「小浜町」として現れ、宝塚市域で唯一の町場として存在していたことがわかっています。

町家は、江戸後期以降のものがあり、通り土間型式を主として、虫籠窓や格子戸などのたたずまいを残しています。



小浜の町並み模型

小浜と街道

小浜には大坂から伊丹を通り、湯山（有馬）に至る湯治の道としての有馬街道や、西宮から伊丹志の渡しで武庫川を渡り、酒や米を運んだ西宮街道（馬街道）、京都・伏見から山崎を通り、瀬川半町や加茂を経て入ってくる京伏見街道などの道筋が入っていました。

このため小浜の地は、江戸幕府から交通の要衝として重視され、抜け荷の禁止や駄賃を定めた制札（幕府の御定書）なども残っています。

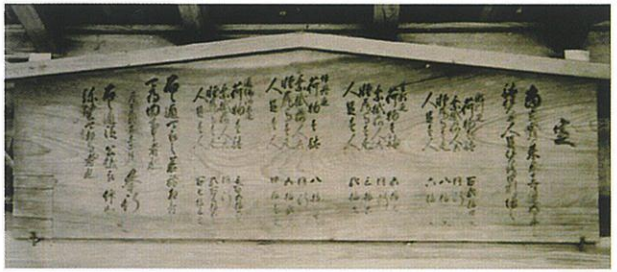
また、小浜は荷物の継ぎ荷のことで西宮市の生瀬宿と争いがあったことも浄橋寺文書（西宮市）などの記録に残っています。

小浜は嘉永四年（1851）の記録によると、戸数202戸で人口800人であり、馬借・問屋・茶屋・旅籠などがならぶ町場で、専業農家はほとんど無かったとされています。

また、酒造りの名所としても知られ、井原西鶴は『西鶴俗つれつれ』のなかで、名酒の産地として小浜の名をあげています。

さらに小浜は大工の町としても知られ、享保八年（1723）ごろ大工の組として「小浜組」が成立しています。

小浜の大工は腕の良いことで知られ、この近辺だけでなく各地で活躍していたようで、幕末期の大工の棟梁西村則周は戊辰戦争後、戦乱で壊れた京都御所蛤御門の再建の棟梁や、大阪難波別院御堂の脇棟梁などをつとめた名大工だったようで、彼の墓は小浜の墓地内にあります。



制　　札